

子どもと死

真行寺 功

巻頭に「子どもと死」は本誌にそぐわないかも知れない。激しい生の息吹きに満ち溢れた幼い子どもに死はふさわしくないからである。しかし意外にも死は子どもの身近にある。放射能の被爆による白血病や甲状腺がんで死んでいくソビエトの子どもたちや、飢餓と病気に苦しみなから息絶えるアフリカの子どもだけでなく、天災で逃げまどう子どもたちや、戦争後の荒廃した村や町で生きること必死な子らの姿を見ると、「死の舞踏」の絵がどうしても思いついて不条理な運命を嘆くのは、不穏な現代の世界状況におかれた私の個人的な抑うつ反応だろうか。

「子どもと死」という場合、子どもが病気や事故

で死ぬという、子ども自身の死を意味することもあ
るし、親や同胞の死ということもある。また友達
の死である場合もある。さらに子どもの愛するペット
の死ということもある。これまでの調査によると、
死を意識し始めるのは小学生の頃がほとんどで、そ
の多くは祖父母の死を契機とし、次いで犬や小鳥な
どペットの死が端緒となっている。

子どもにおける「死」概念の発達については既に
多くの研究がなされているが、なかでもピアジェの
発達理論に基づくものが一般的である。それらは子
どもにおける「死」概念は成人のそれらと質的に異
なるとし、その特徴を幼児期のアニミズムや呪術的
思考、人工論といった前論理的思考特性から導き出

している。つまり死を可逆的であると考えたり、擬人化したりして、生死の因果的な関係の把握が不可能であり、結局、子どもは死を理解できないとされる。また、死の恐怖や不安などの情緒の発達についての研究も少なからずなされているが、その主なものは精神分析理論に基づくもので、幼児期においては死の恐怖は愛着対象の喪失やそれからの離別、つまり分離不安を起源とするものである。ピアジェの発達理論に依拠するものも、死そのものに由来するというより「死」の現象とその説明における前論理的ないし前操作期特有の思考に還元する。

いずれにしても、死は子どもへの発達に深く関わっていて、その重要な意味はよく知られている。しかし、なんらかの意味で死に関わる子どもへの教育的指導という点については余り知られていない。その理由のひとつは死をタブー視して、これを隠蔽し、子どもを死から遠ざけようとする成人の姿勢にある

と思われる。確かに子どもにとって死はふさわしくないが、例えば、致死性疾患に苦しむ子どもの死を克服する過程は、子どもにも人間として死を考える権利があるだけでなく、優れて考えることができるということも教えてくれる。また、親と死別した子どもが喪を経て、りっぱに実存的危機を乗り越えて行くのを見るとき、モデルとしての大人が死を正常化して、死を子どもの身近なものにすることの重要性を痛感する。

このことは、幼児期に生命の尊さを教えるだけでなく、死を驚き恐れるところを育てることの必要性を示唆している。このようなところが生命への畏敬と人生に対する謙虚さを生むのではなからうか。死への教育が論議されている現在、「子どもと死」についてあらためて考えてみるのも意義があるのではなからうか。

(金沢大学)